

平成 26 年度 放射性物質事故等対応資機材に関する検討会（第 2 回）

1 検討会の概要

(1) 日時：平成 26 年 12 月 1 日（月）14:00～16:00

(2) 場所：東京都千代田区霞が関 1-3-1

経済産業省 別館 1 階 108 共用会議室

(3) 出席者（敬称略・順不同）

委員：鶴田 俊、山口 芳裕、富永 隆子、武藤 重男、松井 真、中村 力、
立石 信行、萱津 雅弘、中丸 浩昭、鹿志村 平、金澤 文男
オブザーバー：熊谷 征則、土屋 兼一、小山田 智哉、鈴木 芳男、鈴木 健、
小林 信之、木本 光彌、島田 浩寿、坂本 昌也

2 概 要

事務局より放射性物質事故等対応資機材の調査結果、調査結果を踏まえた消防活動の有効性及び検討会報告書の構成(案)等について説明を行った。

【主な意見等】

- 資料の中で紹介している資機材は専門的であり、消防活動において活用するのは難しいのではないかと。また、災害現場の状況が不明な場合、それぞれに適応する資機材が異なるため、資機材の特性を理解したソフト面の教育も重要である。
→【事務局】様々な災害に対して、どのような資機材が最も適しているのかといった視点でも検討したい。
- 放射線遮蔽服について、放射線の防護効果は期待できないのではないかと。
→【事務局】放射線遮蔽服の防護効果を理解した上での紹介とする。
- 線量率計の方向特性、エネルギー特性について記載すべき。
→【事務局】資機材の特性等についても整理したい。
- 資機材によっては付属品がないと設定が変更できないようなものもあるため、備考欄に消防活動における資機材のメリット、デメリットを記入すべき。
→【座長】資機材の開発目的により仕様が異なるため、委員の意見等を踏まえて消防活動に有効な資機材を整理していただきたい。

- 災害の状況が不明な場合は、感度は低いが高線量まで測定できる電離箱式の線量率計を使用する。線源位置の特定等には感度の高いシンチレーション式を使用する。また、現場で使用する際には表示の見やすさ等も重要である。

→【事務局】測定器の視認性等も考慮して検討する。

- 災害現場の初動の段階では、状況が不明な場合が多く、多数の資機材が必要となるため、マルチに使用できるものが良い。
- 活動のフェーズ及びその基準に沿って資機材を調査することも重要である。
- 検出活動は、災害の規模や状況により時間を要するため、資機材の使用方法を熟知し、その特性について考慮する必要がある。
- ポール型検知器を線量の分布に応じて設置することにより、検出活動後の線量確認や隊員の安全管理に有効である。
- 資料の中での要望は誰に対しての記述か。

→【事務局】消防機関からのニーズを供給側（メーカー）への要望として整理したい。

また、資機材の活用に関するソフト面に関しては、消防側の問題として整理したい。

- 消防本部独自での資機材の導入は財政的に難しいため、財政的な援助も検討していただきたい。

→【事務局】消防庁では、現在、緊急消防援助隊の無償使用制度で資機材を消防本部に貸与しているが、この検討会の結果を今後の参考として活用していきたい。